



VISIT

真夜中の訪問

AM12:00

うとうとと眠りかかった私の顔の上を風が右へ左へとゆっくり撫でている。姿の見えない同居人が、やって来た。zzzzん。いいや、このまま寝よう……しばらくして、ゴォーというなり声と共に、不気味な風がベッドの廻りを渦巻いた。ハツとして飛び起きると、薄明かりの中に、頭からすっぽり被った黒い三角帽子の中から目だけをギラギラ光らせ、黒マントに身を包み、手には鎖鎌さえ光らせた男が立っている。

『あ・悪魔!』恐ろしさにガチガチ震えて歯の根があわない。
『怖がる事はないよ、驚かせて悪かったね。手荒な真似したりして。ちっとも起きないんだもの。今日は友人を連れてきたんだ。』姿は見えないけれど、懐かしい同居人の声。
『いや、失礼しました。』悪魔は、その装束を脱ぎ捨てた。すると、ごく普通の青年男性が代わりに立っている。きちんと刈り込んだ髪、黒縁の眼鏡、清潔なスーツ。整ってはいるけれど、なんの印象もない顔立ち。

『ほ・本当に悪魔なんですか?』
『僕は、真正証明本物の悪魔です。だからといって見たところはこんな風ですよ。芝居がかったこんな装束でもなくちゃ誰も信じてくれないから、いつも持ち歩くようにしているんです。現に君だってこんな事でもしなくちゃ、起きようとしなかったでしょう?』

『あ……ちょっと眠くて……』
『君は! 昼間あの乱暴者の子猫と一緒に、たっぶり2時間も昼寝をしたじゃないか。ちゃんと見ていたんだ。それでこの時間に眠り込んでことはないだろう?』

『す……すみません、それで、今日はなにか……あつまさか! お迎えじゃないでしようね?』

『お迎えだって? ふつ。君の生死など僕の知ったところじゃない。いや、誰の生死だって、我々のように、宇宙空間の闇に漂っているものにとっては何ほどの意味もない。たしかに君達からみれば、我々はこの世のものって事だろうが、存在するという点においてはね、そんな事はだよ……ちょ、ちょっと君その子猫どうにかしてくれないか。さっきから僕にじゃれついてしょうがないんだ。』

『すみません。まだ小さくて、しつげが出来てないんです。』
『ふん。黒い毛並みで頭が良ければ僕のものにでも使ってもらえるところだけれど、こんなアナグマみたいな猫じゃね。まあ、いいさ。それで用っていうのはね。まったく用がなくちゃこんな風に正式な装束まで持って訪ねたりしないんだ。近頃、君達のこの世っていう所に現れづらくなってね。』

この世界にはめっきり神秘的闇とか、宇宙的な静寂とかなくなってしまっ、昔は良かった。日が落ちて夜にさえなればどこだって我々の世界だった。それに近頃じゃ子供達も大人も男も女も、皆悪魔顔負けの事をしてかすから、どっちが悪魔かわかったものじゃない。我々の面目は丸つぶれというわけだね。だいたい悪魔っていったって、そんなに悪い事ばかりしているわけじゃない。天使の方がよほどたちの悪い悪戯をしている場合もあるんだ。実際のところ……せめて、見かけだけでも、君達や天使どもに負けまいとしてあんな格好で登場するけれど、欲張りな奴らの金儲けのネタになるのが落ちさ。情けないったら……しかし我々も自由自在に見えてもこの世への決まった出入り口はどうしても必要なわけで、それでどうってことない人間(や、失礼)の所へ、格好なぞ気にしないで出入りできる入り口を作っておこうと、君の所へ一言挨拶に来たのだよ。何、わざわざ断らなくてもいいようなものだけど、友人が(君が同居人と呼んでいる彼の事だよ)是非一言断っておいてくれと言うものだからね。奴には奴の都合があるんだらうさ。そういう訳で、この先この部屋で何か不思議な事が起きてても、驚かないでくれたまえ。』

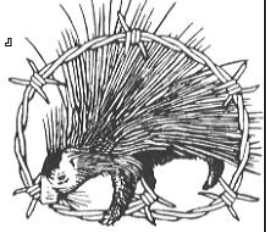
『おれたちも、そんな……』
『精霊のなせる業さ、害はないよ。お礼に……そうだね、そのうち、何か君の願いを聞き届けよう。』

『そのうちって? ……』と、聞き返す間もなく
ゴォーという風と共に普通の悪魔は消え去った。

あとには、いつものように点けなしの電気がチカチカした部屋。

夢かなあ……

子猫が不思議そうにいつまでも、天井を見上げていた。



COLUMN

鎌倉の猫事情 その二

猫の話に入る前に、ちょっとカラスの事をお話しなければなりません。私の記憶では、十数年前まではこのあたりの住宅街に、カラスはいなかったと思います。たまた、川の浅瀬の小魚を狙って、海辺から遡ってくる離れカラスが見かけられるくらいで、カラスは浜にいと決まっていたものです。

海には、カモメがいます。彼らは水に浮かぶ事ができ、少しなら潜る事ができますから、大きな魚に追いかけて水面が上がってくる小魚や、丁度今頃の季節、のんびりとキス釣りをしている釣り人がうっかり落としたりした魚は彼らのものです。しかし仲間同士の争奪戦の末に獲得した魚も、すばやく食べてしまわなければ、上空からそれを見ていたトンビが急降下して、大きな嘴で獲物を奪い取ってしまいます。

トンビはカモメより高く、カラスより長く、上空を飛び廻る事ができ、飛翔も降下も自由自在な飛行の名人です。大空は彼らの領分です。海ではカモメが動き、トンビがそれを奪う。では、カラスは何をするかと言えば、拾います。飛ぶのが苦手で、泳ぐ事も浮く事もできないカラスは歩き回るのが得意です。とにかく浜を歩き回って死んで打ち上げられた魚や、トンビが落ちていった魚を拾って食べるしかないのです。

カラスは朝早く浜へ行って、漁師の地引網の手伝いをします。網目に引っかかった小魚をついばんだり、浜で干からびた魚を食べて掃除します。この領分がなければ生きては行けませんから真っ黒な集団となつてなわばりの浜を守っています。

ところが何年か前からこのバランスが崩れ始めました。いったい何があったのでしょうか。カラスの集団は街への進出を決めたのです。早朝路地に出される家庭や商店からの残り物が目当てです。もちろん、食べ残しをカラスに献上するのを、とやかく言うわけではありませんが、困った問題は色々あります。そのせいでマスターはすっかり腰を悪くしてしまいました。

ここで寝ると腰の調子が良いと気に入っている南向きの三畳間の前の庇で、いつも明け方からカラスの大騒ぎが始まるのです。とても寝てはいられません。また、店で皆が家具直しに使う黄色い真新しい軍手がなぜか気に入って、ある朝窓を開けると、あたりの屋根一面にカラスがとまり、それぞれが得意げにうちの黄色い軍手をくわえているのです。それは、恐ろしい光景でした。そんなわけで、屋根はことごとくカラスに占領されてしまったのです。あ、すっかりわき道にそれてしまいましたが、こういう事情でこの辺り猫は寝床の屋根を追われてしまい、今では、カラスの顔色を伺う始末です。昔から日当たりの良い屋根は猫のものだと決まっていたのですがね。 本当に困ったものです。

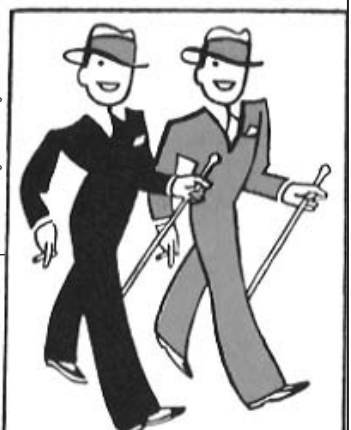


INFORMATION

ミルクホールタイムスは、毎月20日頃の発行です。インターネットのホームページでも掲載していますのでご利用下さい。バックナンバーもご覧になれます。皆様からのご意見ご希望などお待ちしております。

fax 0467-22-1179

<http://www.milkhall.co.jp/>



to be continued